



系猫地

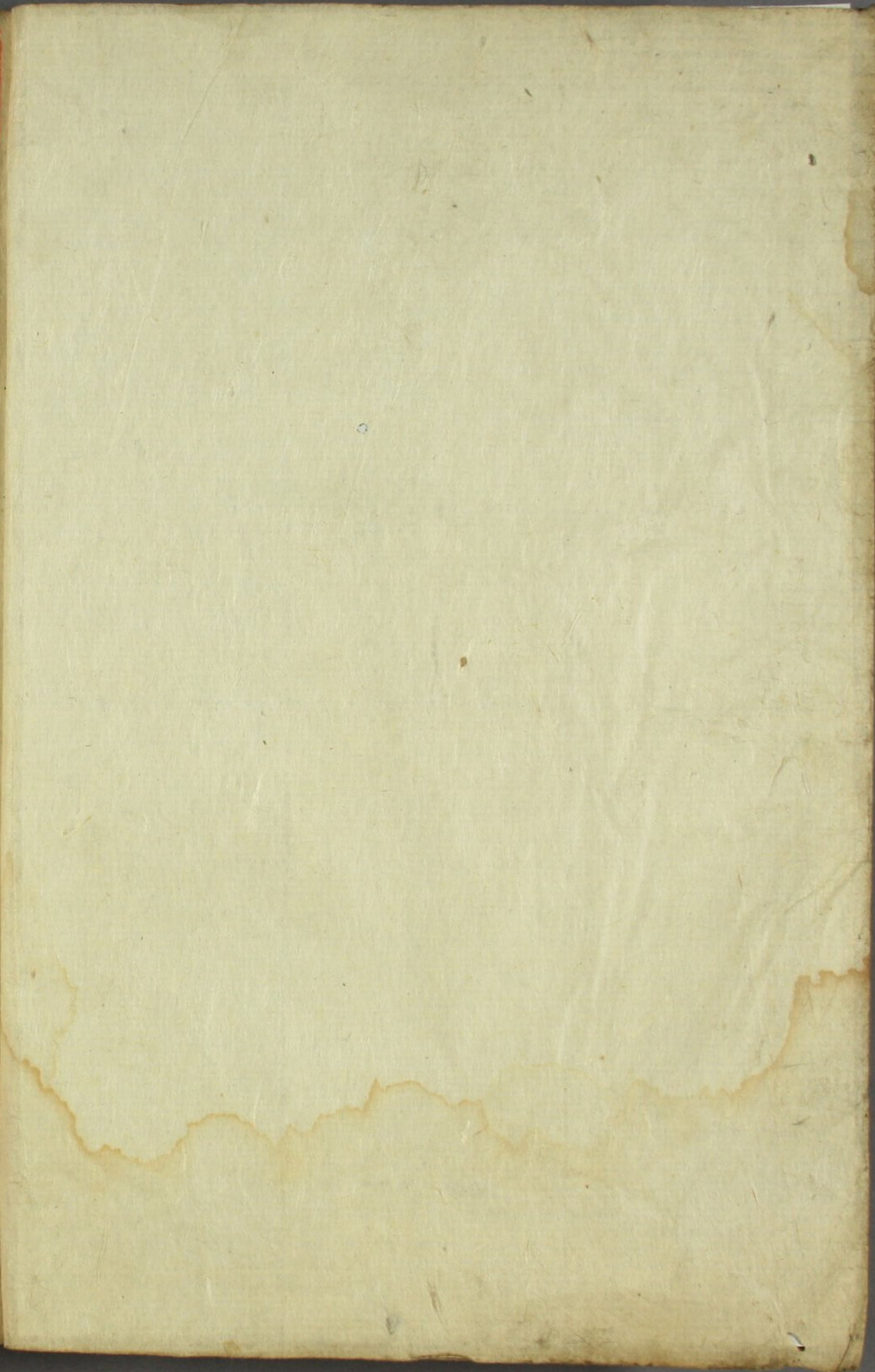
紙人撰

中村俊定文庫
文庫 18
186





二條大相國良基公法御記の道世と表す
 國名利小給者之類政射信其猶少なり
 とあり六狂物物狂いのま極なりと書とあり
 之の故甚き者あり能諧の天函鴨鳥二振して法
 と被り妄言とて偽書と書色蘆花人礼去の後生
 前に秘事傳授と海方と愚昧法者評洞真成礼
 酒食義服醉其の利便其一人命の詞と色蘆花遣
 ち者より之類に射の類中三年をうり此内十村日凡二百
 日遊ふなり一其比のいぬは付と下と白と掃と折敷
 下者ちの勿御能諧の席なりと云ふる事なり
 色蘆花
 礼記の年までい名古屋の七反付来せし礼所にて乃



享保十六年

不猫蛇院前慢獅子坊龍蓮二虛詞

二月初七日

俗林園愚庵主考

會は集大垣等に數日逗留多しは會ありて波内令之
たてしは事か京人津膳所等八會にて芭蕉我等
かせる席八谷は得せは行出對て右の日數をれ觀せ
此等とて事なる所知所をのれ孔去は海神より言
わらふは得る其後初心求て歎きに拍く今に出来る
とて今一人有分は也事よに二年は後行分とれ重
且と我に統者志のありし得は何れと二吟は密事と中月
二吟をいはくとも事めは彼者受あはし一わいの者
た近平二十年は芭蕉より直傳傳正傳授秘訣
及後傳正に知る者がなと諸方は言まはれ事しは
は此等とて老右とて教露川翁とて度は入り有

そは者いあかき事よの教に余もるる一秘傳授
おあきとて事かある初なる者去(同)とて事しは
其堪方事ともいはれ又た一と事一人公稱の冷泉家の
方書の秘事しは通しく一系公の傳と翁の事其れ也と
は偽書とていりこつ言に傳秘事と後傳實は一人公
傳和子ハ書事ハ傳本或能諸知とて公今集事
傳授するもの事は傳授せざる者甚牙にわらぬ文有又
その傳は更なる事ありなる事去を是れと云わん
今報は後よりハ意路程礼物物ハ事ハ公の心とていり
なま老ハ事と事行付ハ事ハ有る事ハ後書
とのハ龍樹天親菩薩と今官に事ハ佛佛くと事ハ

障りやて孔子も今宿にせんとも昔は不亂の經
を大踏踏禪家には孔子も昔は不亂の經
に古今一人の聖人と今宿にせんとも昔は不亂の經
の失るる礼の儒者は意を知らざる者なりと云ふ
ては指す龍樹を天親は何故にけ放言する者ん
かやある心とたの世と世と世と世と世と世と世と
神と世と世と世と世と世と世と世と世と世と世と
身と世と世と世と世と世と世と世と世と世と世と
有經説のよ 莊嚴法同經曰曼珠金色女諸曰能於精進
為除一切衆生煩惱是名少の家又曰能於少色生此流轉以
琴力使化令解脫名少の家世に少の者ハ捧燒ヤキは香飯初ハ

遊の女に兄弟親族は然は不顧佛法せし云曰と未來永劫
の苦患と忘れ情欲は慎まはつ猶も地もちりか
と妄言説し人をと欺むまは又使り又は法炬池羅尼經
量應慈悲慈愍心存せ勝負獲た大皇罪汝慈悲點と名
利をよくする事はなし世間は無常の所と婢子ののとくもは法の
小童へんがとは我の慢りめは也ハ人を重んずるやハ又曰應
慚愧を生ず貪心は不得し我の慢を無し消滅し施主は善根は自ら不慚
人を出家は法の是の等の經をんがらん汝の慚愧といふ
まはつらんがんが貪の生ず我の慢をとは悟慢龍樹の教に也
とくもは慚をすたの是の書物ともんは謙遜卑下辭
讓ともの針のさいはらんがんが人を慚慢施主は根

と酒肆娼房のそ先承業火焼之しふは个止す後此
菓と如見猫乃莫鳥の香に好ふとて自分分に酒肆娼
房の遊ひを周くぬき行ふ是れなりんも果迷浮屠の如
く成く釈世の法は思ふに彼は是等乃更吊り如くなる者
之を以て阿含經曰出家以自立為苦以不自立為
樂俗以不自立為苦以自立為樂非云ふかのれを以て
て自立は好樂しゆ娼房衣服香味の貴へば未だ其
の事とてと累業一芭蕉の遺書と云ふなり一後我侍舟
りて京と松とにいらぬに又京に石牌と云ふ城は樂
寺を誣て鏡取術也喻(汝)京信の者よと遺書に幻

一後とて芭蕉くも何かに可い事之京住めしなり身
小て何と云事と芭蕉へ真實法を云事一山本も云く
はくはも故我利の種はくはは流塚ありて事なり
遠長なること京中へ由る十月十日なるは三月
とる事世間の法事取世といふ事とありて其法
ぬき小依くはは何事止まらば事と云田舎より
宝物靈物用帳出と律事と云ふる意は汝の邪智を
けりて是を返りてはは娼房の謀計なりとれは義服と
身はまゝに高果と保まるとはなりあやふく思ふは
妄言と云教のよと云教教はなりと云は云連行後
き事と云安国曰賦貴者服是云禿上と云禮園(カ)なり

坊主身乃復もろの東停機其勢記の地へお知せぬ芭
蕉後骨家一と申すも信にふれ者も其非を改
め申す非とててん御名もふれ親の清きとて 佛經曰
首有一狸張口伺氣の有氣を穴に刺さ之入腸指生返食糧
臟腑患痛遂同程文遂至冷純此其依聚活信不護根門
被欲損心速同程走け此經りめ次也汝も今之所皆速
門程走り又曰喰然宗燒鉄丸畏却具綿申綿速燃器此
其日速燃佛日思之入信聚活不善護戒心不正念も欲
火燒心捨戒還俗此文實に汝身り身合りの如事に死
心もやむい事言と申私に蓋れ忘却するものや申とら
十淨の心虚實儒佛荒莊何と云諾能借入何と云今合を

ほやい證文不出勿偏能借入事かよふとて高振人とする
りもて眼道連行分別不利の便とてこれ邪智之ゆえとて此
虚言ゆれれあ合と行と同とて誹事とてや一の實や云此
可少物も分別のれ者同とて事法記と令とんを為とて同
世も用ひね事言ば其の新式の免滯は清く汝世の自享
式芭蕉或東たれ或白鳥經いやとて或目といふ物も幾ある
とのと芭蕉派名遣用は善やとてあのはく偽まあや
かとの化ははれまるとて是も亦とてこれいふ二条殿の式同
くはれははれまるとて是も亦とてこれいふ二条殿の式同
白鳥經云經の字先之佛說經云菩薩は説く
海と申すと佛者にと拈がし知能佛法知する者の云

分り都合なり儒者の言を人書く日用の經を竹抄に
經と云ふと史記云く此の經を馬經と高麗に至る一
日何故に此の經を中と貞法存を書か
括弧を挿し新式の首を細くしれるは能保の法に
息めしよる者なりといはれしは思ふに
初めの令を本に思ふ事あり也一也誰か改め
るに定書の偽書にて明ならず自分なれば
は於今を以て經を意ひ十年廿年と隨身と
ゆふ別て意をある者一若し違つて思ふ
後世に我が事なり其角の書田舎めり杜園越分と

重く思ふ意の書流定立の意は等しき者なり
能筆にこれ流用基の次款よりなり蛙形也のり
眼用中より後世に清穆の侍を侍りこれ
形也の条より次款より十年の海より所書然
其角の條より其の意にこれ然る果や眼を
思ひ兩人の條より古池の條より眼用中より
なり也知由なり松の條より能く
初めと述はるの法を治り侍授を
而能知る事なり初めの者なり
自撰くと句に續後義行腹痛事あり

本朝文體日本國の人の文の體せしるる是より作付し
方と同一本朝と云ふ内中將軍家將吏と家門跡汝
と儒佛老莊の學者詩文奇字者もらに保たぬ
題字能くも此らわねの至極なり東に十論
いれし今も振程の上村と宮殿樓閣とせし人
とく一の實といふ事かすれぬ物之又文體の内
由候もて侍所此中ありと詩は始り漢始りとも
詩は文字のいへり中へは義とて候名の佛其
の力とてし一候は中候は候名も何やと候は
候名と漢字との別あり候名といふ者の萬家集
のと候名を論阿太志野書も阿の字あり

又その候名も心あり候名あり候名とて候字の正
を義候名太の字ゆひといふとて候名ありとて
のやいふもなり候名も文字の考とて候名に
名吉備公の別名なり平候名空海の作もや皆
候名もなり候名も義也候名詩候名もなり
ゆとて候名もなり候名もなり候名もなり
の詩朝鮮清朝の人も贈答和韻とて題も候
日本は候名もなり候名もなり候名もなり
和名もなり候名もなり候名もなり候名もなり
と大座と吹と百太郎と吹候名もなり候名も
と候名もなり候名もなり候名もなり候名も

半多鳥の目の儀見(空)園(龍)者(智)天(地)成(成)成(成)て
か(更)女(子)な(り)の(性)年(の)く(ん)の(邪)女(女)と(曰)ひ(し)の(女)首(首)ち(害)
而(己)な(り)の(奇)怪(な)る(事)も(甚)き(事)見(見)け(り)町(の)僕(僕)女(女)も(其)
あ(る)の(似)ひ(み)未(行)け(り)廣(き)徳(道)の(似)と(し)溝(溝)踏(踏)堀(堀)と(形)に
た(打)て(未)行(者)ら(下)な(其)か(ら)云(事)ふ(と)取(取)る(事)也(事)也(事)
有(事)有(事)云(事)云(事)實(實)に(猶)少(少)あ(る)の(地)女(女)あ(る)に
く(大)坂(坂)め(り)見(見)せ(物)り(は)事(事)に(物)く

一 柳連哥の法は新式(新)舊式(舊)を(改)造(造)し(新)式(式)古(古)式(式)而(而)新(新)結(結)白
毎(毎)り(物)物(物)と(取)り(中)也(也)此(此)儀(儀)を(其)か(は)し(中)を(事)め(る)
以(以)る(る)く(月)記(記)の(教)を(定)ま(る)と(卷)二(二)折(折)り(者)千(千)白(白)の(一)今
別(別)り(神)總(總)叙(叙)放(放)五(五)字(字)の(教)表(表)り(せ)し(由)今(今)新(新)式(式)ハ

二條の相(相)由(由)受(受)基(基)云(云)年(年)御(御)行(行)り(あ)り(勅)と(し)應(應)安(安)五(五)年(年)十(十)二(二)月
に(定)り(新)く(其)に(一)條(條)の(攝)政(政)と(兼)り(事)也(也)又(又)杜(杜)丹(丹)院
光(光)公(公)事(事)と(し)三(三)條(條)め(り)定(定)ま(れ)た(り)此(此)道(道)の(龜)鑑(鑑)也(也)凡(凡)そ(そ)
位(位)る(る)官(官)の(字)藏(藏)有(有)歷(歷)に(し)と(謂)け(り)改(改)ら(る)事(事)に(あ)り(勅)
と(し)し(江)重(重)半(半)の(御)新(新)式(式)の(和)漢(漢)廟(廟)の(法)法(法)字(字)紙(紙)独(独)小(小)用(用)元
ら(重)し(し)の(能)儀(儀)和(和)漢(漢)廟(廟)の(法)に(此)受(受)基(基)云(云)中(中)轉(轉)儀
多(多)才(才)徳(徳)道(道)に(達)人(人)少(少)く(光)明(明)院(院)宗(宗)光(光)院(院)後(後)院(院)後(後)園(園)融(融)後
和(和)院(院)其(其)代(代)の(天)子(子)此(此)御(御)新(新)式(式)を(教)り(か)る(事)多(多)く(世)に(行)く(事)也(也)
家(家)乃(乃)古(古)會(會)員(員)と(安)勤(勤)進(進)也(也)其(其)由(由)後(後)光(光)嚴(嚴)院(院)御(御)即(即)位(位)の(母)之
種(種)に(神)意(意)南(南)高(高)の(御)方(方)に(あ)り(し)神(神)意(意)な(り)の(御)即(即)位(位)例
と(事)也(也)位(位)知(知)か(る)由(由)き(事)と(し)此(此)條(條)殿(殿)實(實)叙(叙)小(小)事(事)

氏清因ハ神爾に良基と用ひたる所と仰られ御即位
なされし御登極の時高御座あり執柄は御傳授な
されずあり其比其礼子傳きられたる事知れりしに良基
上御傳授をより今和漢の字もさるる高位も將賢は御
人多御座りしに御勅は之御製作の事紙教書
なされ此帖少くも怪と統念聖恩之隅連能の燈燭と
其上一條の大國相あるに思ふに如加と云ふは其意あり
又和漢の廣く著述の書多し世に行はるるに牡丹丸丸人
公案と云ふ此二條あり定は何人其法と破り年々半あり
やい道の室燈籠の文も勅定改訂せしむる也能傳の上
にて白蓮之南なるもやち物ありと云ふこと其新式の旨と

初めの心得安中に能譜と云ふ書新式の旨も遠く書れり
先代書と云ふ事深き心あり是れもさるる事あり芭蕉
公其存せしはそと物にいらし其古式芭蕉公其存せしは
可也芭蕉のそとれもさるる事明なり或は何有の法
制れありと云ふ物有るも物と天下に流り行ひ用ひ法也
延弘公の自來の式日等に之傳り知れり何故に存
或は中れりまとは是れ自もさるる事先此らも十年餘
かたあらしもさるる事存る所なり母なき故其自凡事也
物なりと云ふ事あり云因今も杜國又越人なりと云ふ事
芭蕉公ありは傳授はそと云ふ事未だ其傳り續け
黄帝なる神降臨録の序と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ

何一海の流花竹書道乃即深なる公任と道乃乃
言後と云ふ心しく拙者もしく色をたすまは直り
見聞と云ふ者之同なるも若と云ふは云々實り
之何れも心流の中も旬物道乃即深なる也
而も其角事ふは是れも由行一鼻かけ様鼻
乃有後は等々同日一新式の見たり等々身を見て
命息の以事てれ一表り月々は喜始ふはと云ふ
も用るふとれ心行乱者也遊女の歌を立り一若憲一
て捨るおのれも手付め物に同しんは佛の法中
に梅式同様にしるもしく拙る向くも公の世中に
やにと云ふ早もるも等々佛化の法也と云ふと結

毒なる一軌能進繩シユンハ皆なるも等々新式に成るる物の本
女といふは不書り如此の歌のよるも若と云ふは倫也
有や其の心女も思ふも一男も思ふも一と云ふは物
常由遠の信は備るも其の意は野草の結と云ふは魚
鳥の精進なる也此や云り同馬鹿の物に人男や
女といふ其の女も思ふも一遊女も思ふも一佛化
事めしは心も思ふも一若と云ふは公又
皆遠なるも一其の女も思ふも一蹴躑り一正花と持せ
松流花に上りて色文の首也正花の八櫻の花を以て
之如く蹴躑りも一松流の心も一其の物も一佛化

只の序も余白くても其にてより一かきさるまは又高の心也其分
別のみとすはたより其の如きなり去るは昔は凡の如き
ありて一其の意と云事と其の如何も不思議人の心は此
衆の其の如き法と見知法は得て中ほよみ結奇怪なり
其故にゆらある人かかき事や只の如くは見え
韓連之曰甚矣人好怪不來其端不執其末惟怪之欲
と違ふ人語と實に新ら奇怪と判と得と海邪家小
道者ばたはる者なり云と一余殿の或も道正路
に風流やと口まの仕かゆと文音の園出行人
おのまはる故に譬喻經曰有一長者生子而愚也其家室
乘船于累子満載沉名と香精且貴所之實有女大流

不信同侶皆友編己独不得去思矣其伴編觀市中化見炭
最駄焼香作炭希以速售衆人見之嗔情責責香雖
遲獲有不安今焼成炭後何所得其も其果多の良
基公の新式の名續公羽の當流用基建立の名香乃
室と馬床の偽言の公炭りてゆふ得所いとも
喻一朝に千金と得とも心同へ飛くま事

一 汝者十論と云ものを見れば意なきは其序曰也
意庵にて事法律と云録と編を其行抄と歌いぬ是
偽に己其河江人始て行す皆吊何角と括圖して其兒
もの形我れと云抄皆吊海江や事是あて大津
乙別業もし吊はや事たはあて備其時其法

佐して初、霜月和句比に江戸着、そのちの翌年正月
早く、少長名古唐入、帰りのち、所、よ、一月月中旬、其、同、小、集、信
源、書、の、俳、諧、の、巻、も、其、の、い、書、を、ね、可、書、者、て、お、き、書
前、中、や、は、今、中、其、河、を、舟、の、盤、を、よ、ま、る、方、か、と、不、遣、
と、中、さ、れ、か、と、中、事、之、の、事、之、の、其、書、の、創、年、歳、具、以、越、さ、れ、
今、年、小、治、利、命、息、の、以、ね、事、と、中、出、の、其、の、中、採、俳、諧、乃
文、盤、より、集、さ、せ、し、る、名、古、唐、に、て、荷、守、野、水、越、会、去、小、集
可、被、如、と、の、事、も、又、命、息、の、こと、と、年、の、事、初、は、狂、ひ、て、大
ち、と、速、名、め、て、狂、可、果、に、心、得、抄、を、今、書、の、中、に、て、れ、は、
我、小、う、と、其、文、集、じ、る、事、可、以、持、と、思、ひ、故、依、の、れ、邪、に
只、ひ、て、お、い、と、の、其、時、に、あ、は、れ、の、狂、言、と、海、島、の、方、二十

年、初、名、古、唐、入、あ、り、て、子、海、法、や、始、り、其、上、行、抄、と、云
と、の、其、人、記、し、て、と、書、言、也、と、明、道、法、行、抄、と、信、州、書
の、い、韓、退、之、行、林、法、門、の、書、と、と、記、る、ま、ね、先、行、抄、に、
書、も、ま、う、二、年、の、四、年、海、水、紀、を、れ、と、二、四、年、後、の、事、の、記、を、れ
ぬ、と、ま、り、れ、と、ら、兩、頭、地、に、と、ら、と、年、時、の、時、を、又、席、の
奥、に、以、事、し、つ、不、備、と、て、和、奇、三、神、御、照、護、あ、れ、傳、小、抄、に、
御、符、と、書、あ、ん、抄、と、書、指、名、を、と、書、や、と、一、早、此、抄、を、文、に、て
傳、之、誰、の、書、の、に、抄、を、文、好、好、と、と、と、容、易、に、抄、を、文、可、立
事、此、抄、撰、の、其、の、心、も、今、書、と、思、ふ、し、け、れ、直、書、に、人、の
信、と、ら、ま、ん、と、思、ふ、心、で、出、る、抄、を、文、何、れ、も、小、抄、を、文、何、れ
今、好、し、し、と、思、は、れ、是、年、と、思、ふ、の、抄、を、出、る、抄、を、文、何、れ、も、

李陵始て此の志を漢の谷氷に始て七言武帝栢梁臺に
群臣に此を七言を始て此の志を漢の谷氷に始て七言武帝栢梁臺に
と云ふ事有と矢野乱者く史記の漢書傳に東の羽令命と
の歌と云ふ人漢書傳に史記の漢書傳に東の羽令命と
曰く此の漢書傳に史記の漢書傳に東の羽令命と
馬書合起る歌の轉句印云く連行する文字をてことあれ
和の假名の他漢の假名と云ふ字の字はくある馬書者
を字文字の假名と云ふ字の字はくある馬書者
詩と云ふ人漢書傳に史記の漢書傳に東の羽令命と
和の假名の他漢の假名と云ふ字の字はくある馬書者
を字文字の假名と云ふ字の字はくある馬書者

も者之知やね言なれと見やねま出出候まふ狂言書
高尾川先すれ候らぬと云く古書家厚帷所召傷
易則証やう被入質の御言千歳の刺と云ふ今のと
おのまろ云く所治証やうとあけおせまはせおはせ候の小僧
おて志と云く白雙葉帛の詔と云く園林のこの園と云く
る海なるまはらん若んぬの初めらに此譜散とて根道連
行なやねと云くはき河の儒佛老莊口舌のれ八瓶が人と化
草奈と云く所所と云く馬牛の書と云く痛痒と云く小喰せ候と云く
彼と云くのと實思ひる振と云く人今と云く止するまくと云く漢書傳
孫小傳りうてと云く家小佛經の律と云く法然の教と云く等
の法と云く授のたてと云くや文首有と云く法然の教と云く等

菅原の禪と佛經の授一牛陀使のなまき事と官家御存生る
寸多事途後程う云き信言夢中少佛法あるか夢幼泡
浴と佛陀のしと少佛小官家と若朝の鴻儒あり佛陀の
交りふちとありて御人の儒と若朝の御忠行と御作りと
せ見え不佛者奇怪の注文に早爰あり是思念まゝとく
黄葉とんせは法号と同一せし佛と見え方のせぬと居也
のそに夢中佛法の進利や人の善徳た御門の縁と縁せ
事かぬぬの周知ありて正道に再に入す元外利欲の爲
ハ愚痴曲の心ありて供養中に芭蕉清律ハ何と云
神佛の公傳をうらむ官家ハ佛經法也ハ若朝と名を知ら
芭蕉の衆女夢のゆふハ誰とせぬと云る虚や越人いしはて

指と鹿のしとぬ糸杯又同古池の蛙に眼と用て家小天
より受續て自悟とて地皇の當流同卷の治教と云二百五十
韻の集知ぬに懐てて而中教する也とありて古風あり
其治教二而中教より當流と家と云てハ新古のいりち
うねぬと汝等ハ何と云ふいの新のやと云てハ夢の傳ハ
若朝の夢と同一なり馬床なる家説あり 自此頃の本傳
ハ白鳥經のゆい傳と見えや經の字ハ文字首ハ不中ハ是
ゆきん其の作てしと云まハ本傳ありハ 然ハ其言今
ゆしあり人の娘と妹よりして先づ聲ハ不夜私中ハ若朝と
云男振と一ハ同と云くこも若朝と云ると云割のそく
あぬ作已言と見えハハ 納の字經ハ字介とて

の癖の中より書少く少敷余の心の中より法使死の白鳥程のと
今程と云きてい進ふ如く記言と異致の及知れども不常人のいふは
自其の處とて得て下併自の明をば者も進んで其の音も今更
の及同く有不ぬ様くら風来りて此の便は起さるると此の
探さ様むあやうの形新といふ佛壇の障子の色も施り切つて
あふ不ぬ者なりと此の便とて如くも迷惑する河公大木如見
自正なりと又白く家高の事にとり河河驛雑房の極小
周がすと尙角如打り高所とてと異眼度我々の事と知
願ふ物店小道因縁の事とてい思ふ事と事と云てと今と
組治民の事とて河紙海と業積屋と業とてあはれ中に可なり
其の公の師進に如く小治共通精進なりとてあはれ馬床村と知

申す一河驛雑房の懸ひり周るぬ人の事とて心不執り
の河のまゆ中とてわねぬて身と滅一途と異生の時と知是と
周の河の心在るるとして冷めて作務京法宗度女と極小周が
下と又白く宗の事とて行と其の令分て周れといふ
ある事能得する者の親又進取りてして其の何と思ふとて
思ふぬ事とて河の邪智といふ自分法法愚行とてまよふが不後
と此の者也又白く他端而してはれと爰と虚空の持めと世との人
和と云是又と云ぬとてまよふが邪智とてあはれ人わと云大鼓持世
の抑薄韻者も自分中とて世とて大鼓持廻るといふ事とて
思ふぬ事とて散れと分はらぬ思ふに人として其の信とて河公飛
傳と云事とて河公の事とて其の傳授とて取世と送れと

紀地は地の名あり致能格物の源目かけふる先致能格物を
まよふとて條目か叶と何流の信と聞か此の馬鹿とやれ
社とよとと人のあそくね事いひね馬馬床あつ十のふれ
の流いひて社傳号、不知致能格物か叶て天下に一物とらん
と何と人の心もいひねる事、さる者もあそく事、天下の能
人と云ふものなり

一 身三能格の法と云内小詩哥連哥は融とれ氷の氷より
及此宗林来と春集んまといふ内海實と不知故り如是なり
能格詩哥連歌、歌とれとは相ひあつと云事、勝と云
事、いひはれ、つと、皆のつね事、詩哥連歌、さへ、た、是、なり
侍人の事と委なりと思ふ中、か、事、は、我、奴、も、ま、ま、着、る、と、る

故く佛者の中、家と貴いふ、曰、地をさる、云、分、氷、氷、ま
勝て冷やりの此、氷、氷、揚と云、内、能、格、の、詩、を、連、哥、に、揚、る、
その分、あり、定、の、事、の、何、れ、曰、詩、の、り、は、新、の、り、也、く、連、言
能、格、又、曰、し、り、と、る、と、能、格、連、言、哥、勝、其、道、は、至、事、二、
地、の、事、も、り、と、る、と、能、格、詩、の、侍、哥、連、言、か、揚、て、氷、の、氷
寒く冷や、氷、氷、此、氷、の、勝、也、と、春、集、ん、六、編、は、云、分、氷、氷、寒、や、
あめ、揚、暖、中、の、氷、局、是、者、之、氷、の、氷、は、春、集、と、能、格、勝、り
論、ハ、能、格、と、思、云、云、分、の、涼、ハ、同、也、兼、ハ、正、也、ハ、同、也、の、正
也、と、春、集、ハ、小、賢、者、の、所、あり、如、く、正、の、正、也、春、集、と、思、て、の
能、格、と、し、揚、る、と、り、云、事、本、後、正、は、不、知、細、り、せ、は、故、に、其
揚、る、梅、也、と、白、く、梅、海、集、と、文、に、い、ひ、ぬ、好、見、好、あ、の、の、也

詩経連奇知とて其の他借の類もつと詩の其の流
の類を記すの揚せぬる同くせらるる詩者其道に入では
いふも勝負の甚るるや他借奇類連奇師と見え
に之他借類つてふとたは吟詠と然る様と又曰秦の優誦
楚の優誦淳于髡と尺信の辯中歌國とわくや彼等何
國小國の和して戦争止ると尺信の辯と云ふ早時八明ぬま
尺信の和の示り如云抑薄者福者知くと云て尺信の後の
害和則か義食義服と云う類の思故に優誦優誦淳
髡たるの遊説辯士の淳(尺信)の富と云ふや此者法徳の
此類も又曰と即種秦張儀の王家と諫の敵國とわく文
武のめと云と何といふ中意は皆皆と流の海に種秦

張儀の王家諫をさる事なり此六國諸侯は借号と王家と思
り其周室や勸と彼等といひ和もをさる有り有は史記
て尺信六國の諸侯と云ふを秦と誦うと六國秦に飛
ぬる地と割地臣臣と云ふは比云尺信の優誦と云振る者
其の國とわけて文武をやさるやと云ふと云ふと云ふに
甚き法に各儒佛老莊八巻あり二万あり尺信他借の
世法の聖賢の心法と云ふ道のと云ふと云ふと馬康のこれ
佛説八巻儒書二万言に説説ね西書見はせや他借
此書と云ふと云ふ見と者わわのまを云と云馬康の
儒書佛書に可有の法とて一切經と操り尺信と知るを聖賢
の法と云ふ物わいの法即者十のやと云能福世法と云ふ

来々神儒佛老源氏物語サロミ夜草花ハナ軍書イクサノチ牙書ウヂの事コトとして
其他者その他の心ココロの氣キを以て是これを言いふ事コトはすすべからずべからず佛ブツ語ゴ乃すなはち世よ法ホウと世よ法ホウ
は外ほかの心ココロの氣キを以て是これを言いふ事コトはすすべからずべからず佛ブツ語ゴ乃すなはち世よ法ホウと世よ法ホウ
私言シゴトの推おし進すすめり者ものは其その身みを以てを言いふ心ココロと云いふ事コトは
何事ナニも其その心ココロの十じゅうを以ては言いふ事コトはすすべからずべからず佛ブツ語ゴ乃すなはち世よ法ホウと世よ法ホウ
也又また曰いははらしし思おもはば始はじめに物ものの二に意いを以ては言いふ事コトはすすべからずべからず佛ブツ語ゴ乃すなはち世よ法ホウと世よ法ホウ
道ミチやや虚うつろ實まことの徒た文ぶんと終つひりに例れいの強つよ弱よわの力ちからを以ては言いふ事コトはすすべからずべからず佛ブツ語ゴ乃すなはち世よ法ホウと世よ法ホウ
の二にと結むす語ゴ也なり云いふ事コトはすすべからずべからず佛ブツ語ゴ乃すなはち世よ法ホウと世よ法ホウ
事ことなり物ものの二に意いを以ては言いふ事コトはすすべからずべからず佛ブツ語ゴ乃すなはち世よ法ホウと世よ法ホウ
ありと云いふ事コトはすすべからずべからず佛ブツ語ゴ乃すなはち世よ法ホウと世よ法ホウ
以もつて云いふ事コトはすすべからずべからず佛ブツ語ゴ乃すなはち世よ法ホウと世よ法ホウ

實まことに中ちゆう庸ゆうの法ほふの求もと水みづ一いつ冷ひやし此こゝに集あはれ集と本ほん集しゆの所ところは
ぬきぬき云いふ事コトはすすべからずべからず佛ブツ語ゴ乃すなはち世よ法ホウと世よ法ホウ
久く人物ぶつを以ては言いふ事コトはすすべからずべからず佛ブツ語ゴ乃すなはち世よ法ホウと世よ法ホウ
誓ちかふ人ひとと云いふ事コトはすすべからずべからず佛ブツ語ゴ乃すなはち世よ法ホウと世よ法ホウ
道理だうりは強つよ弱よわの力ちからを以ては言いふ事コトはすすべからずべからず佛ブツ語ゴ乃すなはち世よ法ホウと世よ法ホウ
例れいの強つよ弱よわの力ちからを以ては言いふ事コトはすすべからずべからず佛ブツ語ゴ乃すなはち世よ法ホウと世よ法ホウ
か信しん言げん物ぶつの強つよ弱よわの力ちからを以ては言いふ事コトはすすべからずべからず佛ブツ語ゴ乃すなはち世よ法ホウと世よ法ホウ
力ちからの強つよ弱よわの力ちからを以ては言いふ事コトはすすべからずべからず佛ブツ語ゴ乃すなはち世よ法ホウと世よ法ホウ
やや世よ法ホウの強つよ弱よわの力ちからを以ては言いふ事コトはすすべからずべからず佛ブツ語ゴ乃すなはち世よ法ホウと世よ法ホウ
もも世よ法ホウの強つよ弱よわの力ちからを以ては言いふ事コトはすすべからずべからず佛ブツ語ゴ乃すなはち世よ法ホウと世よ法ホウ
と云いふ事コトはすすべからずべからず佛ブツ語ゴ乃すなはち世よ法ホウと世よ法ホウ

とてわが物性を知有る所の慢言いふもその智仁勇
三徳を統へて結ぶるを至賢にして其の三徳は自修の
結成とて悟るるを去る物性を知る能はざるを
のめりて之を育公地見之故に怖るべき事なりと
わが物性眼小見ふ者有る戦國の遊群の賦をのこしと道理
の澄文を信じてしるる各自遊業洞明の二對の精宗は法
如くと遊業洞明の二對ある所の洞明身南ののりしと律者其
は遠くかると國とて遊業と對儒と佛と對心と
云ふは儒の有るは法とて儒者儒と對りて其の
己の遊業父母と扱ひて家とて對りて儒とて
はては佛者のなりは法とて其の心遠くはるる
はるる

洞明三朝は法とて其の代りて其の心とて其の
義心法肝なりと對りて又樂天の詩りて虚堂の
筆は石鬼法術ありとて是れは其の虚堂の
天佛有るなり其趣合なり樂天の詩文と見
るは佛者之内轉法輪之縁又百千言却意提種
八十二年功徳林なりと詩文の類律者の
文集よりて其の詩文五首見頌の二つ
所とて其の遊業洞明の二對は河内不
みせるは其の中洞明は其の詩文高貴
君臣の義と法石のわが身法を法と
同く見之ぬるなり其の詩文遠くはるる

常のふる鬼の術有と撰守の言しつる言何と云ふ人
中へ依は早下辞讓と云と云ふも釈迦より下寧か云の龍
樹と今言とせんのかのれ常なる物も又鬼の術有を言を
よる言事と云ふは猶也なり

一 中へ虚言論曰虚言實言は相け實言虚言は補の何の及んば
くもや何とも解おの疾言はやも増明と實言と虚言
少知つては虚言と補の言はこれきう二つありは虚言を
くひの言も事し行しつる言相りとは虚言相りとは言も言は
虚言言も補りとはいふをわゆる補りとは虚言と補言と虚
りて虚言も言て補りて虚言も言はつて虚言と皆大偏出
の行はぬもやか行しつる言分て又曰孔子は牛力の戯をいあ

とゆや論語の語とつていふ見戲と云と原言見せしを
思ひつて孔子は神心に義を指しつて牛力の語を孔子の
戯めあつては思ひつて言中揃やする事と云うは是れ
ふもあつては言をいふに佛経の所に歡喜踊躍と云
言る有はと云ふて釈迦の踊躍言は聲聞縁覺見世漢の踊
りも有はと思ひつては言あはれは言と云ふも思ひつて
又牛力の戯と佛経の要とて法華に今用權顯實と要とて思
回教と云ふも一備有はるも牛力の語の論語の要も其も
偏り誰小すことゆも言はれつては論語の要も牛力なるも
其も亦りか取事ゆも今用權顯實と要とて又言はれつて
今用權顯實は法華經の文と云ふも天台妙樂の經は法華

とて帝代に思ふ疾を自者より麻の大擔ゆりて賜ふる茶を華
陀遍鶴と術を乞ふる心意は違同息貫にくと大柄人新代
本園方りの故云云抄くるとこれ抄にふいふ心より他は林のま
見えぬさき故人の心云あり日暮り人有盗金者當市敬宗時
至撥而走勒回其後日而盜金於市中何の對日暮不自久徒
見金耳志所欲則忘其為實實は等々也芭蕉に抄くさき
と協し至聖賢と云まゝ家人同刺し中佛神と欺に自分の偽
手に傳す小者の入財を偽り故人小介及とんを至聖賢の書
中意と由たの如指し合と家此後云と云て世の後世を
余花のまじりて欺に信たれ思ふ所は不恰ましく抄く心と
口訣傳授のり抄く事計より思ふ市中と横切の酒肆

陰房の心はくろく

一 中五婆情論曰古一情のこいに今一婆情論の初は云今意
り他情のまをまの首へ婆今情之依徳七百平静とて修く
路下情のまをまの首へ婆今情之依徳七百平静とて修く
此情を改て心めし外も心は修むは西極の能端とて修く
古池の蛙を眼と用むと事新小辨して若きと若き海の
能信と専や一發中今に古元分他情の句は抄り抄りか
難と抄半し首へ公とる中能信か云事婆故とる
以意表り心済る中今に能端の本とて取守翻書し各自又
の忠考も甲冑と云すれは忠情備り衣履を依とれ若情能信と
先公の命馬麻のる云と婆ふんとのまを抄り抄り今に婆

情の事ハ氣ハ通海也之ヲ田胃也市也此忠と思ふ事ハ
此情備の情と云何と思て云ハ海ハ情大如ク獲着之也
忠と云ハ君父ハ敬也一軍道者ハ逆ヤ軍相違ハ多ク獲之忠
ハ大情ハ備らるる也亦亦敬也之ハ食食ハ情也此者ハ思ハ物
着物の徳と云ハ敬也若ハハ食食ハ情也此者ハ思ハ物
因ハ食食ハ情也此者ハ思ハ物
此者ハ思ハ物
此者ハ思ハ物
此者ハ思ハ物
此者ハ思ハ物
此者ハ思ハ物
此者ハ思ハ物
此者ハ思ハ物
此者ハ思ハ物
此者ハ思ハ物

以別の敬ハ字と云ハ海也市也此忠と思ふ事ハ
此情備の情と云何と思て云ハ海ハ情大如ク獲着之也
忠と云ハ君父ハ敬也一軍道者ハ逆ヤ軍相違ハ多ク獲之忠
ハ大情ハ備らるる也亦亦敬也之ハ食食ハ情也此者ハ思ハ物
着物の徳と云ハ敬也若ハハ食食ハ情也此者ハ思ハ物
因ハ食食ハ情也此者ハ思ハ物
此者ハ思ハ物
此者ハ思ハ物
此者ハ思ハ物
此者ハ思ハ物
此者ハ思ハ物
此者ハ思ハ物
此者ハ思ハ物
此者ハ思ハ物
此者ハ思ハ物

智王城の儀式より有り天子より民間まであつてはあつたけ
たかふかたかぬ其地よりきき言ふよりき人の云々と知れ
知り顔あり王城の儀式の仁義地獄の林想と對しき書
他諸殺盜淫妄地獄の身想なりは法を聞其の地獄の身想
より直地獄なりと先殺生をぬと思ふ如く地獄の大殺せり佛
法を聞かば命を以て命と佛語の外に之を振る慢れ云らじ
廻れ佛地獄なりと我慢はくは胸の成也之佛性と殺れ云らば
其者心志と皆殺れそと先云佛語を得我慢自慢橋
を佛説く其の憍慢と命散る人の佛生の殺生形と殺れ魚
鳥を殺り大罪を造ると勅定と夜に取れりも佛は色慾の

いまぬの言れぬ物いきて書きて云て口訣傳授と佛と取れり
何とあつと思と書よの死より地獄命と捨てくはと殺盜思
は長つる言ことより其事なりといへるは酒肆淫房の遊のみ
周りよと云て不及其地獄意は天の他諸佛にらまはれ
釈迦の説の般若六百卷より佛の弟子に當りて此論あり佛佛
光莊持身連身と云ていふことと云へるは皆妄言なり於て
其の死にけ地獄の身想と又白地と佛家から平生心とい
儒道は物の心と先他諸の地と云其地を極れ地と云と
時と云て字あり物の心と云と史と地明と極を行何のまよ
るべき地といふを言ていふは極は平等物の心と云つる
佛語の地と思ふが極は極と云て白の各男女對乳交

夫の如く跡法諸師より位名として下りたるは古くありて
一馬の他傳の依りて馬鹿なるを平しく供是等法を能く修め
皆の如く儒佛の字者穿鑿眼道遠く分ちしもの直云の
馬鹿性といふ和部の式定ししと里村家の技はつれ心
手様法にやといふ又此修しゆ和奇の式定する能く和奇
或定しは和奇先他傳の式可也といふせた里村家の式と
連奇の式を見よ之探恵連奇新式も可也里村家めて定する
様如く是より云と信里村家の表に内かくして裏の月をす
彼の有るを百を捨る法らうとされは類也也ぬ法の何の
和部武里村の技部をゆいする事もなれ云分はる事
皆洗技の所にて云括之増の如く連部也望懐中書入里村

或何と云平礼と云又各儒佛也と曰如愚悟同未悟と問する
是之先河也あま又かぬ其法を云曲如愚と其師(今)事や
思ふ是之先河也あま又かぬ其法を云曲如愚と其師(今)事や
し其向と得中不れ御座候の御初と多る事也へ
悟未悟也と云一様也悟道も今も振んと下り
和光の塵也心又悟道と云思の悟也ねなも念起と云
事也又悟道也其の云分と事皆違ふ事也其其の心持
得ぬ言ひぬ法と事と知平法と事と云いぬ事と事と
又同故今家と歸去す事と歸家隱居事と云歸去す事と
事と彼賦と身と是の法は事と云(行)事と云
冷是而暖非といふぬ事と云字と身と知非善も進む

此の書は、先づ中馬、庶幾、歸教、進む、功也、歸教、深、其、心
也、我、自、性、と、身、自、受、と、能、所、を、一、と、も、の、う、く、と、古、訓、の、り
各、韓、愈、の、理、論、と、好、む、多、麟、の、情、と、一、意、儒、佛、の、中、庸、に
推、ら、る、を、一、途、に、お、し、い、て、ゆ、え、を、と、る、地、小、思、云、推、ら、れ、た、は、如、し
て、又、一、が、一、此、云、儒、書、佛、書、出、世、也、韓、子、の、理、論、と、好、む、退、之、と
其、身、中、遠、の、文、云、道、の、心、一、止、ま、せ、い、お、る、也、理、論、好、む、ゆ、に
多、麟、の、情、と、盡、む、い、ん、で、麟、の、得、を、麟、の、中、原、道、也、道、の、心、
其、身、中、文、の、心、を、と、言、ふ、と、い、は、れ、と、多、く、い、ん、の、文、の、麟、の、心、を、出、れ、り
各、心、と、一、の、心、大、き、に、遠、い、と、一、麟、の、徳、を、一、情、の、心、を、一、其、解、守、麟
所、以、為、麟、者、以、徳、不、敬、と、有、之、何、と、情、を、一、儒、佛、の、中、庸、を、推、ら
と、佛、の、過、不、及、ち、る、と、の、に、は、中、庸、の、心、を、一、と、言、ふ、也、一、云、口、を、め、て

此有非無中道の心ある一云云は、中庸の心は、佛の
中庸の心より又、此の箇の文章を評せば、天下は、他、儒、師、と、言、ふ、
並、之、好、む、と、い、は、れ、り、明、く、い、は、れ、る、馬、康、の、心、の、心、を、本、心
と、い、ふ、心、の、心、が、一、天、下、に、佛、儒、師、と、一、天、下、に、多、く、心、を、一、と、い、ふ、
心、の、心、を、一、心、の、心、に、有、り、佛、儒、師、と、一、心、を、一、言、ふ、者、
云、安、ん、だ、其、外、大、名、師、歴、と、一、有、り、と、一、と、い、は、れ、る、心、の、心、と、
並、て、好、む、の、心、を、見、ぬ、と、い、は、れ、る、心、の、心、を、一、と、い、は、れ、る、心、の、心、
并、に、心、の、心、を、一、何、れ、と、一、可、知、心、の、心、を、一、は、極、の、化、物、と、一、の、繪、を、
心、の、心、を、一、氣、を、一、と、一、天、下、の、他、儒、師、と、一、心、を、一、と、い、は、れ、る、心、の、心、
結、縛、の、心、を、一、と、一、思、ふ、心、の、心、を、一、と、一、腐、敗、の、心、を、一、と、一、思、ふ、心、の、心、
同、心、と、一、心、を、一、不、知、心、の、心、を、一、と、一、心、の、心、を、一、と、一、心、の、心、を、一、と、一、心、の、心、

能者有也。然其のむらあまのの不埒。まはれ氣者。その子。錠
さ。流ん。不埒。と。言。知。する。能。制。り。云。如。と。も。云。行
皆。れ。心。氣。之。他。の。下。り。海。の。氣。と。ち。歸。の。思。ふ。下。良。基。云。或
目。と。彼。に。在。る。も。其。を。小。月。せ。治。希。指。女。志。也。れ。色。在。能
結。意。も。天。り。授。也。と。信。り。下。如。き。虚。言。新。式。と。傳。り。そ。れ。佛。書
て。色。在。の。書。結。子。も。教。有。し。多。い。と。思。と。初。の。飽。ま。て。喰
ひ。漫。女。着。之。穿。結。と。道。と。ある。事。能。結。へ。有。り。ま。さ。と。の。と。思。又
曰。言。と。法。然。と。親。密。鳥。れ。結。て。思。志。の。二。門。と。云。や。の。ま。方。佛
佛。は。は。さ。信。心。不。の。大。乘。の。法。の。僧。達。心。得。遠。か。ん。何。と。思。こ
今。の。本。願。寺。の。僧。心。得。遠。と。用。ふ。人。の。授。の。通。り。身。の。備。信。心。不。
は。大。乘。佛。と。は。さ。む。と。其。を。魚。肉。喰。り。云。ま。は。是。同。の。教。と

儒佛。と。は。さ。子。と。雜。の。ま。ま。と。こ。い。ふ。う。親。密。鳥。の。思。志
と。云。く。自。卑。下。謙。退。の。名。思。志。と。儒。佛。と。は。さ。と。云。く。大。乘
の。宗。と。思。つ。お。の。ま。か。や。祥。儀。の。心。な。き。と。此。佛。書。の。の。に。下
所。と。祥。儀。の。上。の。り。實。の。心。な。き。事。的。之。思。志。の。名。と。大。乘
と。云。く。酒。舞。淫。房。と。ま。ま。と。云。く。の。用。心。と。大。般。若。の。而。卷。より
汝。根。中。の。化。物。盡。の。根。の。本。了。了。寧。か。と。云。く。新。道。を
ま。ま。の。其。心。も。思。志。の。名。と。云。得。る。云。分。親。女。足。の。皆。有。也。
汝。跡。亦。行。所。出。れ。修。り。と。云。く。道。と。云。く。新。道。と。云。く。登。
し。と。所。今。と。思。新。道。行。此。因。何。實。有。と。能。結。の。道。と
云。根。と。云。く。佛。と。云。く。知。せ。ぬ。儒。佛。老。莊。詩。言。知。て。や。て。か
其。の。も。と。云。く。七。女。言。也。況。か。ぬ。事。と。の。の。名。尊。て。亡。女。と。云。く

と同一名を著し守の先に佛語の文章有の三皇の時佛語
傳有の文也一丁寧と號の孔子と今官もん龍樹と今
官もん孔子龍樹と云ふ言を吐き禮義の云ぬ若し
一と云ふと云ふ出候の十の言も家と家教也一丁寧の
何と云ふ事その四書の注にあはゆる程の何と云ふ首の揚雄許
衡と云ふ廣漢將識と君臣の義と云ふ行皆虛之況也と
き揚と地と云ふ此物和奇の連舞は佛語の本云ふと云ふ
皆衆人のけ法儀次第の合ぬ事と云ぬと佛の思慮乃好と
い鳥鹿と種運和不知何むゆ名見龍と付と云己儒佛と
何と云佛の文字可付と云や有と云ふ對とぬ一石の柳坊や
云す首の云法師守法師の関好ぬの也傍の名か一將奇

一
連部は抄を名てれ此合稱ヤウ教の括る名實の富ま
るとは空を見法は國也といふ村名は坊に己と云人と隨
今佛は思馬麻の實の云い頃ある命も若くはま
す所の子者名と二慢坊と云ふまは故是の何と云ふ心かて
付也と云ふは二慢我慢自慢と云ふ也如故の云と云國を謙
能坊主の云身の福と云ふもる振ね留る佛語の事と云
自慢我と云ふ云何の云の云と云ふは佛佛老莊は
亦二慢は名利好也道也此故の國愚一人也云我慢自慢
云慢はれ國愚庵と云庵字と上も置き一云云
才九変化論目昔家小三法の付の有無有心付之心も對袖
は前の婆情と見や一字二意と云と幾も云と云會教

よき念の最清は能く名判の巧は思ふ一念の前後とを知りて
出家を志く人今尤もよき一念の私欲は海念と思ふ坊主意を
面白くもよき佛法てふ時將来地獄は永劫の地と得ず
一念の善念は精進を家と失ふ我の心は是れも亦海は心
変じて有佛と減きと余所の善は縁と思ひておる是れも亦
あやうきなる業とあやうきも夢とあやうきと思ふとあやうき
とて板を埒りぬき塵言の改ぬて何れ物に世方の能得師を念
海念の置打越のよき一顧は汝まを能くよき作述は縁
精義は打越のよき思ひの思ひは有る思ひとてあやうきは
のよき世間の能得師は馬鹿の思ひ有る又此故は善念は越向定
法とて二十五の一條は打越とてよきも亦信業とては体空越向

定る連向とては法は定むるの言の中とて吹草使船集採名言
とてよき中は改常信高のよきとて尾張とては善津吟續鳴海
とて名所は打越のよき思ひは有る思ひとては名所とてよ
の善業も打越のよき思ひは有る思ひとては名所とてよ
あやうき思ひは定むる法は先也善業は定むるよき思ひは
二十五の一條は打越のよき思ひは有る思ひとては名所と
其作意は打越のよき思ひは有る思ひとては名所とてよ
法とては能得の二巻は吟琴の表は表は神徳教放の類は
是れ月二の月とては月とては月とては月とては月とては
中とては月とては月とては月とては月とては月とては
法とては月とては月とては月とては月とては月とては

是又白踏八村向の目影いん因中法松のあらこら付らん
 小室にて是らの情と佛我抗此れをちと付る是八景
 白あらしのや云初めあやみ多きとは情と極す此此と此極
 と云りいし其の他佛の古の情の極のいし云と云
 まき世例のそあつては因中法松と云に抗此れをちと云と
 佛佛と云思ひるる白の時付たやいしとのいし白岩の自言をと探
 卿と云聲香と云是と云二石の中は東花寺八解村合今十
 輪名と云と石十五のあはれと云して七石八解と云の袖注や
 初と古層て日月の鏡なる事如きと云し一編の聲香と云の
 若し白の有七石八解邊寺の極めて若し云と云と云と云
 小室の法松有ん其元の何のいしと云と云に達して極は法

久きまをなして中てそ敬する佛之衆金と云重羅也何の
 小室の法松と云出くは傳付授と雲をさるる事共其もあ心小同
 て及花の以て古の事と古流の佛佛の本がは本秘すて同整
 松八解十五林と云事と云いしと云名と云

- | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| 幽玄射 | 行雲射 | 迴雲射 | 長高射 | 高山射 |
| 遠白射 | 澄海射 | 有心射 | 物知射 | 不明射 |
| 至極射 | 理世射 | 撫民射 | 灑灑射 | 花麗射 |
| 松射 | 竹射 | 存直射 | 可然射 | 夫逸射 |
| 板群射 | 寫古射 | 面白射 | 一貞射 | 濃射 |
| 見様射 | 一節射 | 拉鬼射 | 強力射 | |

是八の十五身やありて又と連弁中法松の秘言はゆくと云る

その流氷の移りゆくを記すに流氷の移りゆくを記すに何
其の流氷の移りゆくを記すに流氷の移りゆくを記すに何
云て流氷の移りゆくを記すに流氷の移りゆくを記すに何
て流氷の移りゆくを記すに流氷の移りゆくを記すに何
ありて流氷の移りゆくを記すに流氷の移りゆくを記すに何
の流氷の移りゆくを記すに流氷の移りゆくを記すに何
に流氷の移りゆくを記すに流氷の移りゆくを記すに何
持て又流氷の移りゆくを記すに流氷の移りゆくを記すに何
と東西の文なり難と参り宗伯の文なり何の文なり
あはれと云ふと實小蛇鹿の録なり何の文なり何の文なり
と凡流の文なりあはれと云ふと實小蛇鹿の録なり何の文なり

生きたる流氷の文なり何の文なり何の文なり何の文なり
新世と云ふ其流氷の文なり何の文なり何の文なり何の文なり
此何と云ふと参り宗伯の文なり何の文なり何の文なり何の文なり
家入ぬと改す流氷の文なり何の文なり何の文なり何の文なり
氷水の中程と持て何の文なり何の文なり何の文なり何の文なり
舟子と云ふ其流氷の文なり何の文なり何の文なり何の文なり
記す何れと云ふと流氷の文なり何の文なり何の文なり何の文なり
第の流氷の文なり何の文なり何の文なり何の文なり何の文なり
はと云ふと流氷の文なり何の文なり何の文なり何の文なり何の文なり
なりと云ふと流氷の文なり何の文なり何の文なり何の文なり何の文なり
文なり何の文なり何の文なり何の文なり何の文なり何の文なり

内録據序と明やんと人々を誣傳信もむんとのまはてて根の事
言と吐り其のいけり者も此の言もな能西銘附就交四喜の注
小字のありし有り云廻者有之他と損事入罪に極むる事
傍授口訣と稱し能事能得の言にんすり字書小等一極むる事
事去に師直叙て録と取心能と云人傳むる事と極むる事
事打ち金比言部と友の録とれ交まると極むる事と因罪と
能事小今とね而の語に事の住守の先は能得の文章深極れ
其外事言同思等十持淮南子に園上好畫鬼魅而憎圖物
馬者何と鬼魅いふ事世而可見也實なる事能得の使むる事
云云と直事帝の元は詩哥の儒佛光莊の七かれの元の知ら
れしと思まると云このり云能得の事八十にて三と有りし

其二と皆偽書と伝人を迷らむ心ゆ鬼魅と書き思魅と
誣初元元能事一れもか一人有者之吊カ如の思入る事
此只班猫のとく事も小こと此心性之固くか自慢り皆如
此内也事一人毒まんと云言か又能言もら物むる事也云
能の事一と能云る能得の法と余能せ才一人と云る事と
佛法て云目心の佛と純煉一固也事能得と云一人邪曲と遊る
事佛事也云深元丹虎丹逆を流し孫蔓りすかり中とんれ毒
蛇らして春と待れけり孫の根と黒白の氣あり嘘と女心を
小事能得の口入と樂と力と忘るといふ吟詠とる事と云
事力とら者と云て人恐れ哥續者能得の者も達てん事
也なり事能得の事と名利の事と云く口也事能得苦と云る事

義不犯と云ふぬれ之佛道の事と云ふて已に又知ると
旬に故初心と服化行邪智までいふてぬまを老佛神儒
の名計圖で推量に云教人のいふ立合をいふ聞はは
竹の秘筆一條殿の抄百人一首の冷泉家の傳等色蘆より
佛授命より由縁ありぬまをいふと佛道を極言する
の佛の心行なりぬまは是皆極と取極を極と其も佛教
半卷儒書なり言身をいふまを各何の身といふは
まの身より十の心は極なり半の心は極なり
如くは又其より律道持身運身其も半何十戒と
心より私の草書ありぬまの心前云各人市中て令と取
人の身よりいふは極なり云如く佛道極と取と極

いふて誹り節島の極端と取らぬ其跡一極師行色
と可取と云ふは深き池ありと極師の身は心より
欲と云ふは蓋ありぬまをいふと云ふは極の心は
誹先不念と偽妄なり身得共誹欺くまをいふは
令欺くことと誹欺と云ふは佛道の虎小返毒
地味と云ふと忘法河羅娘序の事あり今佛みて云ふ
彼戒と云ふこと佛俗の為小立らぬまをいふは
其より彼より有と云ふは書住事小法なり殺過娘
地獄の身相と云ふは前地獄の身と云ふは他より
恐畏を不思色蘆の法半法極と極の事を云ふの
と云ふ精神といふは罪と極と極の身は我より
来世と

尊とぬく意と云新義非禮取行つる云々
一 尊十法或論と何中古風の書お書かれたるを拾ひかへ已事
の秘言とあはれ書う云々古く作するも是れ又白能諸何の
為りまると學杯は言下お能れ抑ありと兼に三守の先皇
其帝二代の御事と申す中分言はく言下お能れ抑有と云
まを例の利輪繩とてく云々水足しは白無名の祭祭
句り止法と云に如物ありと抑あり又云和と云お能れ是と
凡能云の御願天下の能諸師とては並婢子の如く思ふ
如く是と云く及何と教ふと兼祭と云云祭とて付く
は御家の友祭は申すて云といふ其はく及祭と云はれ
お能れと云其時の事と云はれ云々お能れは云々の祭と云其時と

持あり遊嬉之云々いかに祭と計して是也と云其有祭お能
皆其神と云の云々の祭と云名れお能れ如名の祭と云祭と
お能れと云其祭と云其時の事と云物と云其時の事と云
事にお能れと云杯と云云云云云云云云云云云云云云
何にお能れと云其祭と云其祭と云其祭と云其祭と云其祭と
世間の能諸師の兼祭は云々備を云々云々云々の天下の
能諸師と云其祭と云其祭と云其祭と云其祭と云其祭と
お能れのありと云文意の云々と云々祭と云其祭と云其祭と
其祭と云其祭と云其祭と云其祭と云其祭と云其祭と

形に礼は其席に我に出せり十波に宿るなりと約束大
儀膳所改定大垣杜國がしを安めて教習元席同
一色の食と分り或東の道と仰くは人曰道一色の色意法
に二四月の一節に休し粥と焼餅と其の二色に念比り
禱り是又師也有るはと云ふはと有るは筋の事
有て其云言法事ありは如何と人衆の爲記後の起し事
今もや云ふは是言を去りて今卒と用たる色意の文有り
たれ所と對り其とのし彼等遠く同の法事と云ふの據
と瓶のと騷きり得る事後世や云ふは其前とて正
路不行なるとなるは其の心かて近善なりは神靈の爲り
其時事又其知彼等皆い追善は皆色意と想ふとも
いふ事

よもの法去法事追善は佛法意なる高世有る事とて
思ふに同今卒十月十二日其日と日少くは彼等も色と汚
との虚疑とてと老のうと云ふは此一冊と書中色意の神
色の想いと云ふは二つありて風俗の追善とい
ふは由来せぬ事と有る

千時享保十己歲

此書尾陽負山子越人撰

延享四年歲仲秋寫之

